

チャペル週報

No.18

2018.10.15 ~ 10.19

あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、
また、主イエス御自身が
「受けるよりは与える方が幸いである」と
言われた言葉を思い出すようにと、
わたしはいつも身をもって示してきました。

(使徒言行録 20章35節)



西宮上ヶ原キャンパス ランバス記念礼拝堂

関西学院宗教センター

☆ チャペル・スケジュール ☆

時間 10:35～11:05 場所 各学部チャペル

10月15日(月) 神 安崎 嗣穂 (神学研究科M2)
経 学生生活オリエンテーション Part 2 (10/1振替)
人 山 泰幸 (人間福祉学部教授)
理 前川 裕 (宗教主事)
聖和 聖書物語「祝宴への招待」

10月16日(火) 神 夏期派遣実習報告 金 元基 (神学研究科M1)
文 Andreas Rusterholz (宗教主事)
社 「よりよい社会」とは? ⑤ 高原 基彰 (社会学部准教授)
法 大宮 有博 (宗教主事)
経 音楽チャペル ハンドベルクワイア
商 山本 俊正 (宗教主事)
国 宗教総部
理 前川 裕 (宗教主事)
総 インドネシア交流セミナー 2018報告 和三 花菜 (総合政策学部1年) 他
教 木原 桂二 (北山バプテスト教会牧師)

10月17日(水) 院 Andreas Rusterholz (文学部宗教主事)
神 賛美歌④ 水野 隆一 (神学部教授)
社 「よりよい社会」とは? ⑥ 桑山 敬己 (社会学部教授)
法 Christian Morimoto Hermansen (宣教師)
経 秋季大学キリスト教週間を迎えて 舟木 讓 (宗教主事)
商 Chapel in English Gabriele Hardl (社会学部准教授)
人 嶺重 淑 (宗教主事)
理 前川 裕 (宗教主事)
総 村瀬 義史 (宗教主事)
教 音楽チャペル バロックアンサンブル

10月18日(木) 大学合同チャペル「あなたは独りではない～You are not alone～」10:20～11:20
西宮上ヶ原キャンパス 会場:中央講堂
「助けてと言える恵みー人間とは何か」
奥田 知志 (東八幡キリスト教会牧師)
神戸三田キャンパス 会場:VI号館101号教室
「必要なパラダイムチェンジ」 Christian Hermansen (法学部教授・宣教師)
西宮聖和キャンパス 会場:メアリー・イザベラ・ランパスチャペル
「人は愛を求めている」 窪寺 俊之 (聖学院大学大学院客員教授)

10月19日(金) 大学合同チャペル「あなたは独りではない～You are not alone～」10:20～11:20
西宮上ヶ原キャンパス 会場:中央講堂
「人は愛を求めている」 窪寺 俊之 (聖学院大学大学院客員教授)
神戸三田キャンパス 会場:VI号館101号教室
「助けてと言える恵みー人間とは何か」
奥田 知志 (東八幡キリスト教会牧師)
西宮聖和キャンパス 会場:メアリー・イザベラ・ランパスチャペル
「繋がる心の糸ー“大島ワーク”の50年」 岩坂 二規 (教育学部准教授)

◇ランパス早天祈祷会 毎週金曜日 8:20～8:40 ランパス記念礼拝堂 (西宮上ヶ原)
10月18日(木) 宗教活動のために 木村 仁 (伝道部長)
10月19日(金) 経済学部のために 古澄 英男 (経済学部 副学部長)

助けてと言える恵み - 人間とは何か

奥田 知志

18歳、関西学院大学一年生の私は、先輩に連れられ、大阪市西成区の釜ヶ崎（通称）という日雇労働者の町に出会いました。以来、ホームレス状態にある人など、困難を抱える人々と共に歩んできました。

あるホームレスのおじさんを訪ねた時、その方は静かにこう語られました。「夜眠る前、もう二度と目が覚めませんようにと毎晩祈っている」。野宿、再貧困、そして社会的排除にさらされ、追い詰められた人間の叫びのように聞きました。今日の社会が、それほど過酷に人を追い詰めているのです。自己責任論が闊歩する中で、社会は無責任化し、多くの人々は見ても見ぬふりで通り過ぎていきました。

私達の活動は、今から30年前、そんな路上の人々をお弁当をもって訪ねることから始まりました。NPO法人抱樸（ほうぼく）は、1988年12月に活動を開始。これまでに3250人の路上からの自立を支援しました。自立率は92%。就労率は57%です。活動の特徴は、制度から考えない、あるいは人を属性で見ないということです。その人との出会いから発想し、出会いから仕組みを作ってきました。制度ではなく「人を大事にする」、ただそれだけだったと思います。ホームレス支援から始まった活動ですが、出会ったその人に何が必要かを追求するうちに、現在では、就労支援、居住支援、子ども支援、障がい福祉、介護事業、刑余者支援、居住支援など、22部署におよび、専従スタッフ70名が従事する事業となりました。経営的には苦勞が絶えませんが、制度の狭間に置かれた人々との出会いを起点に現在も活動を続けています。「その人がその人として、その場所で、その人らしく生きる」。それが活動の目的です。

私達は、困窮を「経済的困窮」と「社会的孤立」という二つの視点で捉えました。経済的困窮を「ハウスレス」、社会的孤立を「ホームレス」と呼び、「ハウスとホームは違う」と考えています。特に、孤立は大きな問題です。今年一月英国政府が「孤独担当大臣」を任命したというニュースは記憶に新しいところです。自立が孤立に終わるなら問題は解消されません。地縁、血縁、社縁などが脆弱になる中、「赤の他人が家族のように生きていく社会の創造」は急務です。イエスは、「貧しい人は幸いだ」と仰いました。不思議なことばです。でも活動の中で、本当にそうだと思うことがしばしばあります。母校でお話しできることを楽しみにしています。

(日本バプテスト連盟 東八幡キリスト教会牧師)

「産めよ、増えよ、地に満ち地を従わせよ」と 必要なパラダイムシフト

Christian M. Hermansen

あなたはどのような未来を望みますか。あなただけの未来ではなく人類の未来は？たった一人の勝者がいるのがいいのか、それともできるだけ多くの人のために安心して持続可能な世界を望みますか？

関西学院のモットーはすべての人に居場所がある共同体を目指しています。創世記のテキストもそうです。確かに「産めよ、増えよ、地に満ち地を従わせよ」とあり、この聖書の個所が、現在私たちが向き合う、人口過剰や資源をめぐる紛争などの多くの問題の原因であると考えの人がいます。批判する人たちの理屈は理解できます。しかし、ある賢明な牧師はかつて、神は考える力を人に与えられた、と言いました。「従わせよ」は、私たちがすべてを破壊していいという意味ではありません。私たちの課題は、神が創造されたものを守ることなのです。もし、どのような意味かと理解に迷うなら、聖書の一貫したメッセージは、私たちの社会において「小さくされた人」を支援するということなのです。

今回のキリスト教週間のテーマは「あなたは独りではない」です。これには二つの意味があると思います。あなたさえよければそれでいいのではないことと、あなたの調子が悪かったり、孤独を感じたりするとき、私たちがあなたを支えるのです。現在、全世界の人口は78億人です。私が生まれた1962年には、私は31億人のうちの一人でした。小学校一年生で「たった一つのショートケーキを二人で分けるなら、それぞれどのくらいもらえるでしょうか」と先生に聞かれました。私たちはみんな「半分」と答えました。というも、だれも、ほかの人より少なくもらいたいと思わなかったからです。では、78億人で一つの地球を分け合わなければならないとしたらどうでしょうか。

単純でいうと、パラダイムシフトが必要です。現在の権力者は賛美する永遠の経済成長の代わりに、「人類にとって安全で正義ある場所：再生と分配の経済」を作り出すことを目標とするべきだと言うのです。国連が2030年までに実現しようとする17の持続可能開発目標にも、この視点が必要です。QRを見て考えてください。



17の持続可能
開発目標



新パラダイム

(法学部教授・宣教師)

「人は愛を求めている」

窪 寺 俊 之

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出るひとつひとつの言葉で生きる。」（マタイ4：4）

人はパンを食べて生きています。パンは生きるために必要不可欠ですが、**「十分条件」**ではありません。聖書は、神の口から出る**「神様の愛の言葉」**が必要だと言います。愛は私たちに生きる力を与えてくれます。愛は人生を変える力です。

芥川龍之介は「河童」という作品の中で、河童は生まれるかどうかを自分で選べると書いています。河童の夫が奥さんのお腹に向かって「お前は这个世界へ生まれてくるかどうか、よく考えて返事をしろ」と訊きます。するとお腹の子どもは「僕は生まれたくありません。」と返事をします。芥川龍之介は、この小説で自分に**選択権**があれば、自分は生まれたくなかったと言っているのでしょうか。芥川は、35歳で（1927年7月24日）青酸カリによる服毒自殺をしました。豊かな才能も名声も芥川を支える力にはなりませんでした。

私が以前病院で会った老人のお話です。老人は肺ガンの手術を受けて回復しました。家に帰ってみると自分の部屋は綺麗に片づけられていて、すでに孫の部屋になっていました。老人は退院して自宅に帰れることを、ずっと楽しみにしていましたが、家族はそうでなかったことを知ったのです。老人が最後に言った言葉は主治医に、「先生には大変お世話になりました。私は特別にお返しができないので、自分が死んだら解剖に役立ててください」と言ったといひます。それ以後、口を閉ざして死んでいきました。

人が生きるためには**「愛が必要」**です。人には**「身体的死」**があるように**「精神的死」**があります。私達はしばしば人間同志の愛の脆さ、人間の愛の不純さ、愛の中にある偽善を良く知っています。

聖書は「神はその独り子をお与えになったほどにこの世を愛された。独り子を信ずる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである」（ヨハネ3:16）と告げています。「神はその独り子をお与えになった」とは、自分の子供のいのちと引き換えにして人間を助けるという意味です。聖書は、無償の愛、自己犠牲の愛、人を生かす愛があると告げています。現代社会は本当の愛を求めていると感じます。

（聖学院大学大学院客員教授）

「繋がる心の糸」

岩坂 二規

いま、卒業生の方たちとともに、ある文集づくりをしています。それは、在学中に参加したハンセン病療養所への訪問プログラムについて、当時の体験がその後の自分の生き方にどんな意味を持ったか、どのような影響を与えたか、文章を募るといふものです。

その療養所は、全国に13か所ある国立の施設の一つで、高松港から船で20分のところにある大島青松園です。ハンセン病が遺伝性ではなく、感染力も極めて弱く、完治が容易であることが判明した後も、日本では「絶対隔離政策」が長く続きました。誤解と偏見によって恐れられたハンセン病回復者と島外からの若者との“交流の季節”が始まったのは、1950年代後半の頃からです。1960年からは当時の関学SCA（現在の宗教総部）によって岡山県長島の邑久光明園で、1965年からは旧聖和大学・他の学生YMCAによってワークキャンプのかたちで訪問交流が実施されました。大島のプログラムは現在まで半世紀以上継続し、述べ1000人以上が参加したことになります。

以下は、2004年の聖和大学学生YMCAの大島訪問プログラムの報告文集に掲載されている当時の学生の文章の一部です。標題の「繋がる心の糸」はこの年のプログラムのテーマでした。「自分にできることがあればなんでもしてあげよう、と意気込んで大島に乗りこんだ。そこで初めて対面した、生きること（生かされていること）に大きな感謝を持ちながら歩むご夫妻の姿は、幸せて“豊か”だった。逆に自分がどこか貧しく生きているとさえ思えた。あれから大島を訪れるたび、自然の豊かさ、人の心の豊かさに自分の生き方を見直させられ、良い意味で打ち砕かれ、磨かれ、そのままの自分、生粋になっていく自分がいた。大島に頂いた賜物は深く、大きい。」（一部省略）

私たちの社会は、近代化とともに幸福と豊かさを求めてきました。それはまるで台風のメカニズムのようです。人間の欲望を原動力にしながら中心へ向かって大きな風を起こし、中へ中へ上へ上へと効率とスピードを上げていき、それに適合しないものを外へ下へ押し出し排除してきたのかもしれませんが、ところが、台風の中心には風がなく、そこに入り込んだ船は閉じ込められたまま死に向かいます。そこは人間として「ほんとうに生きる」ための場所ではないことに気づくのです。中心に向かって吹く風に抗い、外へ出ていくこと、そこから排除され取り残された存在に出会い、共に歩もうとするあり方の中に幸福と豊かさへの希望があることを、半世紀以上にわたって続けられた訪問交流のプログラムの証言から学ぶことができるのではないのでしょうか。

（教育学部准教授）

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、大学院授業期間中の毎週木曜日にチャペルアワーを開催しています。【どなたでもご自由にご参加ください。】
(17:50～18:20 1405教室)

10月主題:「真の共生社会を目指して」

10月18日(木) 嶺重 淑(大学宗教主事)

10月25日(木) 大宮 有博(法学部宗教主事)

●夕べの祈りatランバス～テゼの音楽とともに～

ろうそくの光を灯して、テゼの歌を歌いながら、皆でこころ静かに過ごす夕べの祈りのひとときです。【どなたでもご自由にご参加ください。】

第3回 10月25日(木)18:30～20:00

第4回 1月10日(木)18:30～20:00

ところ:ランバス記念礼拝堂(西宮上ヶ原)

主 催:夕べの祈り準備会(学生有志)

協 力:関西学院宗教活動委員会

●関西学院会館の日曜礼拝

授業・試験期間中の第二・第四日曜日(原則)に、教職員と学生有志による礼拝が行われます。【どなたでもご自由にご参加ください。】

10月28日(日)10:00～11:00

関西学院会館ベーツチャペル

●第214回ランバス演奏会 クアクレとヴァイオリンによる「ラトビア伝統音楽の調べ」

昨年好評を博しましたラトビアの伝統音楽の夕べ、さらにレパートリーを拡充して開催いたします。ラトビア人は別名「歌う民」。古来より日々の生活、年中行事と冠婚葬祭、めぐる季節や美しい大地を歌で表現し伝えてきました。伝統的な民謡、大切に歌われている合唱曲を、クアクレとヴァイオリンで演奏します。

溝口 明子/クアクレ 秦 進一/ヴァイオリン

と き:11月8日(木)17:00開演

ところ:ランバス記念礼拝堂(西宮上ヶ原)

主 催:宗教センター <入場無料>

●「リトリート at 千刈」参加者募集

今年も、フランスのテゼ共同体からブラザー・ギランを講師に迎えて1泊2日のリトリート(修養会・黙想会)を開催します。千刈の自然と静けさの中で、一日数回のテゼの音楽を用いた共同の祈り(礼拝)を中心に、ブラザーのお話、グループでの話し合い、個々の黙想の時間などを通して、それぞれが静かに自分を振り返り、また共にいる喜びを再発見し、命を深呼吸させる日々。関西学院が大切にしてきた建学のスピリットに体験的にふれる機会です。ぜひご参加ください。

と き:11月24日(土)13:30から25日(日)18:00頃まで

ところ:関西学院千刈キャンプ

参加費:学生・院生 2,700円、教職員 4,200円

募集要項・申込用紙の入手先および申込先:

宗教センター事務室(吉岡記念館1階)

聖和キャンパス事務室(1号館1階)

神戸三田キャンパス事務室(アカデミックコモンズ1階)

申込締切:10月31日(水)の事務室開室時間

問合せ:宗教センター(TEL 0798-54-6018)

●オルガン音楽の泉 2018 Fall semester

パイプオルガンの響きに憩うお昼のひとつ、どなたでもご自由にお楽しみください。

第29回 11月16日(金) 坂倉 朗子(本学オルガン講師)

第30回 12月5日(水) 桑山 彩子(京都カトリック河原町教会オルガニスト)

いずれも12:50~13:20[開場12:40予定]

ところ:関西学院中央講堂(125周年記念講堂)

主 催:宗教センター

●「関西学院クリスマス at ザ・シンフォニーホール」チケット販売のお知らせ

恒例の関西学院最大のクリスマスページェントが大阪のザ・シンフォニーホールで開催されます。参加費は宗教活動委員会を通して関連団体に献金させていただきます。

と き:12月21日(金)17:30開場 18:30開始 20:50終了予定

ところ:ザ・シンフォニーホール(大阪市北区大淀南2-3-3)

参加費(入場料):2000円 当日座席指定(16:30より座席券と交換)

チケット販売:10月15日(月)発売

* 関西学院大学生協(TEL 0798-53-5150)

* チケットぴあ(TEL 0570-02-9999) Pコード 130-125

* ぴあ取扱いのコンビニエンスストア:サークルK、サンクス、セブン・イレブン

* ザ・シンフォニーチケットセンター(ザ・シンフォニーホール内 06-6453-2333)

お問合せ:関西学院宗教センター(TEL 0798-54-6018)

主催:関西学院 共催:関西学院後援会・関西学院同窓会

●大学主催秋季人権問題講演会「終わっていない原発避難」

今から7年前の2011年3月、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故が起り、大勢の人が、避難指示を受けて、あるいは事故による放射能汚染を懸念し、遠く離れた場所に避難をしました。福島県内から県外に避難した人は、公式発表で約4万6千人とされていますが、これは避難した人全体からすればごく一部に過ぎません。

広域避難者と呼ばれたこの人たちは、補償を求めて政府や東電と争うことを余儀なくされたばかりでなく、住宅、就業、子どもの教育機会の制限に加え、心ない差別にも苦しめられました。それは事故から7年経った今でも終わっていません。本講演では、そうした避難者が直面した事実の一部を紹介し、みなさんならどういう選択をするのか、考えていただく機会としたいと思います。

◆2018年11月14日(水)15:10~16:40

場所:メアリー・イザベラ・ランバスチャペル(西宮聖和キャンパス)

◆2018年11月15日(木)

場所:II号館201号教室(神戸三田キャンパス)11:10~12:40

場所:関西学院会館「光の間」(西宮上ヶ原キャンパス)15:10~16:40

◆講師/松田曜子(長岡技術科学大学准教授)

講師プロフィール

長岡技術科学大学環境社会基盤工学専攻・准教授。2007年京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。同年、学位論文のフィールドであったNPO法人レスキューストックヤードに入職、その後同法人事務局長、2012年より関西学院大学災害復興制度研究所・特任准教授を経て2016年より現職。2011年の東日本大震災発生後にはROAD事務局として足湯ボランティアのコーディネーターに関わった。現在は市民参加型の防災まちづくり、広域避難者支援、災害復興、防災に関する市民活動等に関する研究に従事。震災がつなぐ全国ネットワーク共同代表も務める。

* 本講演会では手話通訳・パソコンテイクによる情報保障を予定しています。また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご活用下さい。